

CANTUS ANIMAE × Chœur Chêne × Combinir di Corista × MODOKI

ジョイントコンサート

三善晃の世界

2021年10月17日(日)
ザ・シンフォニーホール

【後援】 JCD 日本合唱指揮者協会 21世紀の合唱を考える会 合唱人集団「音楽樹」 東京都合唱連盟 関西合唱連盟

《ご挨拶》

このジョイントコンサートは2018年に札幌で行われた全日本合唱コンクール全国大会の夜、ホテルに帰り眠れない夜を過ごした時に、私が妄想したことに始まる。ついにそれが現実となった。正に夢のようである。MODOKI×CANTUS ANIMAE、Chœur Chêne×Combinir di Coristaでは何度かジョイントをやっている。だったら拡大して4団でやったら凄いことになるという妄想。

いつもコンクール全国大会でしか会わない、それもすれ違いざまの挨拶がせいぜいの4つの合唱団である。とは言え、お互いにリスペクトし合い、出演順によってはお互いに聴くことも出来た。こんな演奏をしてみたいと「隣の芝生」を見る思いで他団の演奏に聴き入った。

2019年6月、初めて4人の指揮者が演奏会の企画をする為に集まった。夢は膨らみ、三善先生の作品をテーマに3時間を優に超える大演奏会の企画となってしまった（今にして思えば実現はかなり難しい企画だったかもしれない）。

合同演奏には栗山文昭先生をお迎えして指揮をしていただく事も最初から妄想の中にあった。そして何とご快諾いただいたのである。夏には合宿をして演奏を聴き合い、語り合い、「栗山先生に三善作品を教えていただく」正に夢のような時間を過ごせるとその時は確信していた。

2020年2月末、未曾有のコロナ感染症が、私達にとって最も大事な表現行為である『合唱』の全てを止めてしまった。それから1年半、何とか練習は再開したものの一方向に収まらない感染状況に何度も諦めかけた。しかし私達の「共に歌いたい」「栗山先生に教えていただきたい」という気持ちは途切れることはなかった。企画から2年、その気持ちの継続はすなわち合唱音楽の力であり、三善作品の魅力であり、栗山先生の偉大さ故であったことは言うまでもない。

大幅なプログラムの削減はあったものの、この困難な状況だからこそより深く「歌う意味」そして「共に集う意味」をかみしめ、歌いたいと思う。

ここまで辛抱強く私達の思いを受け止めて下さった栗山先生、そして合唱団を支えて下さった方々、準備にご尽力いただいた方々に深く深く感謝しつつ、コロナ禍の今を生きる私達の精一杯の演奏をしたいと思う。

本日はコロナ禍にも関わらずご来場いただきありがとうございますございました。

(松村 努)



三善晃先生が遺された膨大な作品群、そして先生の業績、功績については私が申し上げるまでもありませんので、ここでは触れません。ここでは「三善晃先生の作品を演奏すること」についての私見を述べたいと思います。

三善先生は、「五つの童画」について「絶望を胎生の糧としないう愛を私は信じない」と仰いました。「悲しみは(女声合唱曲)」について「この作品を演奏することは、あなた方の日常が問われるということ」と仰いました。「夕焼小焼」の終止音のソプラノのハイC(高いドの音)について、「東京から疎開する日に夕焼け空を見た時の私の心の叫び」と仰いました。いずれも、作品の演奏の仕方や内容の具体的な説明ではなく、「どう音楽に向き合うのか」という演奏者の姿勢が問われている言葉です。また、谷川俊太郎の詩について「谷川さんの詩には万巻の哲学書に勝る哲学があるから私は惹かれる」とも仰いました。

すなわち、三善晃先生の作品を演奏するということは、その哲学をそして先生の生き方を学び共感し、そこから得たものを演奏者ひとりひとりが音に託すということ。かつて、私が三善先生の前で、「三つの夜想」を演奏した時に、その演奏の良し悪しではなく、「雨森さん、今の演奏、好きでした」と言っていただけなのは、そういうことの積み重ねから生まれた音楽であったから、と信じています。

三善先生のお言葉をお借りすれば、「こういうことを声高に言うつもりはありません(三善先生は折に触れてこのような表現をされていました)」が、ただ今後、三善作品に向き合われる時に、ひとつの参考にしていただければ幸いです。

(雨森文也)

三善 晃 (作曲家 1933～2013)

東京生まれ、東京大学文学部仏文科卒。53年日本音楽コンクール作曲部門第一位。

55年 給費留学生としてパリ音楽院に留学、57年帰国。

管弦楽、室内楽、歌曲、合唱曲、オペラなど多数発表。

平井康三郎、アンリ・シャラン、レイモン・ガロワ・モンブランらに師事。

尾高賞、芸術選奨、サントリー音楽賞、フランス芸術文化勲章など受賞多数。

桐朋学園大学学長、東京文化会館館長など歴任。日本芸術院会員、文化功労者。

Program

MODOKI

指揮：山本啓之

混声合唱曲『嫁ぐ娘に』 作詩：高田敏子

1. 嫁ぐ日は近づき
2. あなたの生まれたのは
3. 戦いの日日
4. 時間はきらきらと
5. かどで

Combinir di Corista

指揮：松村 努 ピアノ：織田祥代

混声合唱とピアノのための

『やわらかいいのち三章』 作詩：谷川俊太郎

- 1
- 2
- 3

Intermission

Chœur Chêne

指揮：上西一郎 ピアノ：浦 史子

合唱組曲『五つの童画』 作詩：高田敏子

1. 風見鳥
2. ほら貝の笛
3. やじろべえ
4. 砂時計
5. どんぐりのコマ

CANTUS ANIMAE

指揮：雨森文也 ピアノ：平林知子、野間春美

混声合唱と2台のピアノのための

『交聲詩 海』 作詩：宗 左近

- I
- II
- III

Intermission

Joint Stage

指揮：栗山文昭 ピアノ：斉木ユリ、浅井道子

混声合唱曲集『木とともに 人とともに』から

ーピアノのための無窮連祷によるー 生きる 作詩：谷川俊太郎

混声合唱と2台のピアノのための であい 作詩：三善 晃

混声合唱曲 嫁ぐ娘に

作詩：高田敏子

めぐりあう、つながる……

大学で合唱を始めた頃、部室でコンクールのレコードを見つけ初めて栗山先生の演奏に触れました。大学3年の時に縁あって栗山先生にレッスンして頂く事に。「君達の音楽には欲がないね」から始まったレッスンの事は今も鮮明に覚えています。その年大学の部で全国大会へ出場。演奏後栗山先生の音楽を生で聞き、音楽の果てしなさを感じさせられる事に。そしてその時雨森先生のモンテヴェルディの生命力溢れる演奏にも触れ、自分もこんな演奏がしたいと思い、MODOKIを結成する事に。その後ご縁も得てCAさんとは三度のジョイントコンサートも開催しました。1997年MODOKI全国大会初出場の時に上西先生とシェンヌさんの演奏にも触れ、その後奈良の練習に押しかけて朝まで先生の家で飲むことに。そして松村先生とコンビニさんの近年の演奏の素晴らしさ……審査員として聞いているのに感動して涙が溢れる経験はそうはない事です。

コンクールという競い合う場でめぐりあった先生方や演奏が私達をここにいざなってくれて、そしてそれを三善先生の音楽が持つ大きな愛の力で包み込んでくれているように感じます。コロナ禍で先の見えないこの時代に、このつながりを通じてまた新しい一歩を踏み出すべく、いまこの演奏会を聴きにきて頂いた皆様と共に舞台に上がりたいと思います。

(山本啓之)

三善晃先生初の混声合唱組曲作品であり、その魅力は約60年経った今も全く色褪せることがない。マドリガルのように自由に揺れ動く旋律、あまりに緻密で美しい和音は、時代を超え、人を超え、私たちの心を震わせる。

「あたらしい指輪」「白いドレス」……今、眩しいほどの幸せを纏う娘と歩んだ道には闇の底のような戦争があった。冒頭の光に満ちた今は、一つの星を辿って過去へとさかのぼる。そこに描かれるのは、ささやかで幸せな生と峻烈な死の記憶である。作詩・作曲の両氏が、共に抱えていた太平洋戦争の記憶、そして、これから嫁ぐ(もしくは嫁いだ)大切な人への想いが、より実存性をもってこの曲にドラマを与えている。

(木下恵里)

MODOKI (モドキ)

MODOKIは、1991年に歌手15人と現指揮者(山本)1人の16人で結成しました。

当時は、3人ほどの社会人(といっても社会人3年目が1人、2人は社会人1年目)と学生(もちろん、指揮者も大学生)というメンバー構成。「とりあえず集まって練習する」ということが、さして難しいことでもなく、好きな時間に集り、活動していました。あれから、30年……。結成当時から在籍するメンバーは、ほんの少し。メンバー構成も居住地も様変わり。メンバーのほとんどが社会人であり「とりあえず集まる」ことの難しさを痛感。それでもなんとか時間のやりくりをして月に1回土日に集まり活動を続けてきました。

ところが、昨年からの新型コロナの影響がMODOKIの特徴の一つであった「全国各地からの団員」の参加に影を落とし、一時期は練習をすることさえできない期間が続きました。「ちょっと仕事が立て込んでるから週末の練習に行くのイヤだなあ……。っていうのは、なんて贅沢なことだったのだろう」と実感。そんな状況の中、点で存在するメンバーをつないでくれたのは、各パート……。1人いるかどうかの状況でも練習(合わせ)をし、それをオンラインで配信してくれたメンバーの活動でした。

本日は、ほどけそうでほどけないメンバー間の糸をしっかりと紡いでMODOKIの演奏をお届けいたします。未熟ではございますが、最後までお楽しみください。

混声合唱とピアノのための やわらかいいのち三章

作詩：谷川俊太郎

本組曲は2006年に指揮者の近藤恵子が委嘱し、岡崎混声合唱団と岡崎高校コーラス部により初演された。五編からなる詩の副題には「思春期心身症と呼ばれる少年少女たちに」とあり、社会に対してやわらかくも強い眼差しを持っていた作曲者の意識が感じられる詩選である。作曲されたのは一、三、五編の「三章」であり、二編、四編の割愛について三善は「音は沈黙を以て対話しようと思ったから」と述べている。

「1(I)」では4声がそれぞれ「どうしたらいいの」と独白的に問いかけ、思春期の機微を思わせる和声が進み出る。打楽器的なピアノと急ぎ立てるような合唱が特徴の「2(III)」では、緊迫感のある無調によって対話者の苦しみ語られる。終曲の「3(V)」では、拍節感を超えた語りかけや木魚による目覚めをもって、対話者の愛される宿命性を説きつけ、音楽が閉じられる。全体を通して感じ得る閉塞性や一種の虚無感は、我々が2020年から直面してきた状況とどこか通じているかもしれない。

本団では2014年に本組曲を取り上げ、香川大会では「2」を演奏している。7年の間に約半数の顔ぶれが変わり、また多くの曲との出会いがコンビニの地平を開いてきた。近年声のブレンドに着目してきたコンビニが、三善作品を再演する。

(馬上幹路)

Combinir di Corista (コンビーニ ディ コリスタ)

グレゴリオ聖歌から現代の邦人曲に至るまで、様々な時代とスタイルの音楽に取り組み、合唱の可能性を追求することを目標に2005年に設立。多様なレパートリー、すなわち「品揃え」にこだわり、コンビニエンスストアにちなんで団名を命名。毎年、定期演奏会を行うほか、全日本合唱コンクール、チャリティー・コンサート等、積極的な演奏活動に取り組む。

2020年には2月に「コーラルフェストかわさき(カルッツかわさき)」にゲスト出演、10月にスペシャルコンサートとして「La serata di “à la carte” (コンビニ風 アラカルトのタベ)」を収録、YouTubeで期間限定公開し「赤い羽根 新型コロナ感染下の福祉活動応援全国キャンペーン」に協力した。2021年には3月に「震災復興支援チャリティーコンサート」を開催、5月に「湘南フィルハーモニー合唱団第28回演奏会(ミューザ川崎)」に賛助出演、6月に「JCDA合唱の祭典2021 第21回北とびあ合唱フェスティバル スペシャルコンサート」に出演した。

合唱組曲 五つの童画

作詩：高田敏子

今週末に迫った大阪での合同練習会に向けて、この原稿を書いている最中でも引切り無しに対応変更のメールが届きます。明日のことが見えない不安。本当に私たちは本番のステージに辿り着けるのだろうか、ただ祈ることしかできません。

三善晃作品のみによる演奏会。私たちは栗山先生から学びを得て作品の本質に迫れることに心躍らせ、困難な道筋であっても話し合いを繰り返しながら今日を目指してきました。諦めなかったのはそれらすべてに対する尊敬と愛情があったからに違いありません。

優れた音楽作品と出会うとき、我々はそれを生み出した歴史の重層性に向き合うことになります。その堆積とはつまり文化であり、未来の子どもたちに大切に繋いでいくべき人類の財産です。しかしながら、その子どもたちの「マスク」で覆われた表情は日に日に失われていくように思えてなりません。物事の価値が仮に淘汰され変容してしまったとしても、子どもの笑顔は信じて守るべきものだと思うのです。それを貫く熱量なしに文化が育つことは決してありません。

「つづいている。場所が私に。私が子供たちに。子供たちが自然に。この地上の時が時に。生命が生命に。人間であることが人間であることに。」(『つ・づ・く・も・の』三善晃)

マスクの向こうの笑い声のために。小さな一歩の勇氣のために。そして明日へと続く文化の一片となることを信じて、私たちはこれからも歌い続けます。「雲と風 こども 輪になってまわれ」と。

(上西一郎)

「人間と地球全体をくるむ愛を歌う」というテーマでの詩人・高田敏子と共同で作られた。詩は「愛」からうける印象からは少し遠ざかり、世界全体や人間社会の虚しさや悲しい宿命を寓意的に描く。楽曲は詩に寄り添って時にコミカルに、激しく、やがて空虚に響く。しかし楽曲の中ではピアノパートを含め、各々の声部は独立した配役を与えられる。世界の語り部、詩の登場人物(?)である風やこおろぎ、どんぐり等、楽曲世界の中は生命で溢れている。

「私は、そうして、やっと、人への確かな信や愛にたどりついた」と三善晃氏が語る愛は、矛盾や失意を孕む世界においてもなお、生きて、歌い続けることそのものだ。

終曲はフォルティッシッシモの人の声とVivo(生き生きと)の発想記号で締めくくられる。

(井上和也)

Chœur Chêne (クール シェンヌ)

1983年、現主宰・音楽監督の上西一郎の呼び掛けにより、当初は奈良県立橿原高校合唱部卒業生で結成されたOB合唱団として発足。1991年に一般化して「クール・シェンヌ(2016年10月「クール シェンヌ」に変更)」に改称(※フランス語でクールは「合唱」、シェンヌは「榎(かし)の木」を意味する)。レパートリーはルネサンスから近現代まで幅広く、ドイツロマン派に重きを置きつつ、直近では近・現代の海外作品、そして邦人作品の名曲にも意欲的に取り組んでいる。結成より30数年経ち、結成当初の団員から、近年に入団の大学生まで幅広い年代のメンバーが在団し、日々「芸術としての合唱音楽」の在り方を探求している。全日本合唱コンクール全国大会で金賞を14回受賞、直近では第69、70、71、72回大会にて4年連続金賞を受賞。

混声合唱と2台のピアノのための 交聲詩 海

作詩：宗 左近

私事。

1987年11月、第40回全日本合唱コンクール全国大会、昭和女子大学人見記念講堂の客席で、栗山文昭指揮、合唱団OMPの演奏を、私は聴いていた。課題曲は武満徹の「恋のかくれんぼ」だったと思うが、演奏については覚えていない。そして、いよいよ自由曲。その年の6月にOMPによって初演されたばかりの三善晃作曲「交聲詩 海」。当時としては斬新な2台ピアノ。第1ピアノが幻想的なモチーフを奏で始めた。何かが静かに始まるような予感。続いて柔らかで温かな男声パートのハミングが空間に満ち始め、その向こう側から「なみ〜……」という声……。その後は、ただただ音楽に引き込まれ、最後の高らかなハ長調の終止音が鳴り響いた時には、涙が溢れ、鳴咽が漏れ、しばらくの間、席を立つことが出来なかった。『こんな合唱曲があるんだ!!』その時から「交聲詩 海」は、私にとって、いつかは自ら演奏したい大いなる目標になり、三善晃、栗山文昭は、神となった（決して大袈裟な表現ではありません）。

そして、今日、栗山文昭先生の前で「交聲詩 海」を演奏します。以上、私事ばかりで失礼しましたが、私にとって今日の演奏にこうした意味があるように、歌い手、ピアニストひとりひとりにも、今日演奏する意味があるはずです。三善晃先生は「ひとりの声より、複数の人間の声混ざりあった音が好きだ」と仰いました。その声の向こう側には、その人数分の歴史があり、思いがあるからでしょうか。「交聲」とは、まさにこういうことなのかもしれません。

初演から34年。今日生まれる「交聲」による「交聲詩 海」をお聴きください。（三善晃先生は「今ここで生まれる音楽を聴きたい」と常々仰っておられました）

（雨森文也）

聲……声の旧字体。人や動物が発する「こえ」、自然や物から聞こえる音のひびき。

地球の歴史の原初から、海は常にそこにある。生まれゆく星の数ほどの生命の源として、静かにたたずむ。曲は、日が昇ってから沈むまでの、海にとっては瞬きにもならない時間のひと時を描く。それでも、人間が歌にすれば、魂を振り絞るほどのエネルギーが要求される。

地球上に存在する、人と生命、そして死者。それら全てが、生と死を繰り返して命を循環させる。その営みの過程で、時に海を恐れ、時に海を忘れ、時に海を讃える。それら全てを、海は寛容する。そこにあることそのものが、生命の力の源流となる。

それこそが、海の営みである。今日もまた、海は海を営む。

（濱田碧允）

CANTUS ANIMAE（カントゥス アニメ）

1998年7月、岐阜県在住の雨森文也氏の音楽に魅せられた「歌好き」たち23名が創団。世界に通用する合唱団になろうという、かなり無謀な夢をもって、団名をラテン語で「魂の歌」と名付けた。翌年、全日本合唱コンクール全国大会に出場し、金賞受賞、以降同大会において金賞受賞16回（内1位文部科学大臣奨励賞5回）、2002年には世界合唱オリンピックに出場し、宗教音楽部門で金賞受賞（3位）、混声室内合唱部門で金賞（1位）オリンピックチャンピオンを受賞した。これまでに、自主公演24回、その他レコーディングや各地のイベントに参加している。創団から20年あまり。団員数は50名程度までに成長したが、全員が無類の「歌好き」で、無謀な夢を追う人々であることには変わらない。

ーピアノのための無窮連奏によるー 生きる

作詩：谷川俊太郎

混声合唱と2台のピアノのための であい

作詩：三善 晃

三善晃、2000年2月13日、合唱団「松江」でのお話より。

「昨年の大晦日、12月31日の夕方、ピアノを私が弾いていました。田畑（政治）さんとか、瑤子（田中）さんとかのことを考えて弾いてたら、まあ即興で弾いてたんですけども、どうも止まんない、ピアノが。そしてどんどんどんどん流れて大きな河みたいになって、そしたら谷川（俊太郎）さんの言葉が、自分の弾くピアノの中から聞こえてきた。生きるということ、いのちということ、そういう言葉です。」

三善晃、2003年1月13日、合唱団「松江ファイナル」にて。「言葉も私が書いた『であい』という曲を贈らせていただく」とお話しいただいた後に。

「そして一番最後『さよなら またいつの日か』ということは言うとしても、それは別れの言葉ではない、未来に続く、あるいは未来のあなた、未来の地球、あるいは、地球のどこかで歌ってる人へ、本当にその人たちへ交わす、信頼の声なのだと。」

「生きる」も「であい」も合唱団「松江」という一期一会の歌の場のために三善晃先生が書かれた作品です。田中瑤子、田畑政治の前年9月の突然相次いで惜別無しては生まれなかった「生きる」。合唱団「松江」の10年のうち7年を音楽と生活を共にした仲間との愛から湧き上がった「出会い」。

すでに、あの日から時は経ち、いまは全国の三善音楽を愛する人の裡にそれぞれの「生きる」も「出会い」もある。しかし、私自身はこの日から時は止まったまま立竦んでいるだけです。

今日、四団体のみなさんはそんな私を心良く受け入れ、生かしてくださろうとしています。

感謝とお礼の言葉しかありません。ありがとうございました。そして、また出会う日を楽しみにしております。

2021年8月31日 書斎にて 栗山文昭

生きる

「生きる」ことは身近に「死」に接し、あるいは死への不安や生きることへの苦しみ等を抱いたりすることで改めて意識したり内省する機会になり得る。しかし、その内容は常に同じではなく、その時々で当然違うものである。なぜなら「いま」生きているからである。

この曲の歌い手はピアノによる無窮連奏である即興的な和音によって導かれ、「いま」生きることについての自己への問いかけは、谷川俊太郎先生の詩と共に祈りとなり、その深さは曲中のfffでのヴォカリーゼで頂点となる。

まさに私たちの「いま」はコロナ禍にある。そこで聴き頂く「生きる」が皆様の心の奥底で「いま生きること」の意義を祈りと共に感じて頂く機会となれば幸甚である。

（赤塚幸一郎）

であい

2003年に合唱団「松江」の解団に寄せて書かれ、同団に初演された。その後、歌詞中の“松江”を“この地”、“初春（はる）”を“秋”に書き換え、出版された。作詩作曲ともに三善先生が行っており、その音楽からは先生の優しいまなざし、そしてその語り口がありありと浮かぶようである。

秋もまた始まるの季節だった。幾度も交わし合う「さよなら」は別れのための言葉ではない。ここから始まるものを信じているからこそ交わせる言葉なのだ。

風いだ水面のように穏やかなアカペラから始めると、曲の表情をより豊かにする2台のピアノが加わり、色彩が増していく。そして全てが一体となり、みんなへの、歌への、未来への賛歌は大団円を迎える。

（木下恵里）

Conductors



山本啓之

1987年佐賀大学入学と共に合唱音楽に出会い、1989年に同大学を率いコンクール全国大会にて銅賞受賞。1991年にMODOKIを結成しコンクール全国大会には昨年まで18回出場し9回金賞受賞。2015、16年には文部科学大臣奨励賞を受賞している。2016年から香川県において女声合唱団monossoを指揮、同団を2017、18年コンクール全国大会金賞に導く。2017年より香

川二期会合唱団の指揮者に就任。

2006年には合唱連盟九州支部より指揮者特別表彰、2007年には佐賀県合唱連盟より特別表彰を受賞、同時に佐賀県芸術文化賞を合唱団と共に受賞している。現在は客演指揮や審査員、講師としても活動の場を広げている。香川県合唱連盟理事。



松村 努

東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。三林輝夫、河瀬柳史の両氏に師事。指揮を黒岩英臣、ヘルムート・リリンク両氏に師事。ルネサンスから現代までの宗教作品を活動の中心とし、東京・神奈川における数多くの合唱団の指導者として、コンクールにおいても優れた成績を上げている。

全日本合唱連盟理事、日本合唱指揮者協会副理事長、神奈川県合唱連盟顧問、合唱人集団「音楽樹」会員、ヨコハマ・コーラルフェスト実行委員長、フェリス女学院大学講師。



上西一郎

大阪音楽大学音楽学部声楽科卒業。声楽を横田浩和氏、指揮を松尾昌美氏、合唱指揮を藤井宏樹氏に師事。現在、クールシェンヌ、アンサンブル・テルミナ、合唱団ル・グラン、Ensemble Nisi、奈良女子大学音楽部の5団体の音楽監督。全日本合唱コンクールではクールシェンヌを率いて金賞を14回受賞、宝塚国際室内合唱コンクールでは5回の入賞、また19回大会

ではOAKシンガーズを第1位に導いた。2002年より朱雀シンフォニーオーケストラ常任指揮者としての活動も開始し、管弦楽作品の演奏にも精力的に取り組んでいる。奈良県合唱連盟理事、日本合唱指揮者協会関西支部理事、21世紀の合唱を考える会合唱人集団「音楽樹」会員。



雨森文也

1959年生まれ。指揮法を黒岩英臣、ピアノを立川のぶみの各氏に師事。CANTUS ANIMAEなど、11団体の音楽監督を務める。全日本合唱コンクール全国大会で多数の金賞を受賞。2002年世界合唱オリンピックに於いて指揮者賞を、2008年にはアレツォ国際ポリフォニーコンテスト(イタリア)に於いて最優秀指揮者賞を受賞。

近時は、オーケストラとの学校公演などの指揮者としても活動している。



栗山文昭

1942年島根県に生まれる。島根大学教育学部特設音楽課程卒業後、二期会合唱団、東京混声合唱団で研鑽を重ねる。現在「栗友会」(りつゆうかい)の音楽監督として、NHK交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団をはじめ多数のオーケストラでコーラス・マスターを務める。また「栗友会」各団の演奏にも力を注ぎ、委嘱活動、シアターピースなど合唱の可能性の追求に意欲的に取り組んでいる。なお、2022年1月25日、サントリーホールにて、台本・詩・演出、加藤直。作曲、寺嶋陸也で、合唱オペラ「少年少女恐竜記」を委嘱、初演する予定。

武蔵野音楽大学特任教授、島根県芸術文化センター「グラントワ」いわみ芸術劇場芸術監督、21世紀の合唱を考える会 合唱人集団「音楽樹」芸術顧問。

Pianists



織田祥代

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業、同大学院修士課程音楽研究科ピアノ専攻修了。院修了後渡欧し、アムステルダム国際音楽アカデミーマスタークラスにてファイナルコンサートに選抜され出演。「音楽家たちの饗宴 室内楽シリーズ」にて新日本フィルメンバーと共演。「2台、3台ピアノ協奏曲の夕べ」にてオーケストラと共演。プラハ スメタナホール

にてチェコ・プラハ室内管弦楽団と共演。2021年には東京混声合唱団定期演奏会に招聘される。現在ソロ活動の他に、室内楽、声楽、合唱、コンクール伴奏、講習会等で幅広い演奏活動を行っている。



浦 史子

京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。在学中、第8回ピアノフェスティバル、学内リサイタルなどに選抜出演。フランス ピアリッツ夏季セミナーにて、G. Deveze氏に、ドイツ トリアー国際マイスタークルゼにて、W.Manz氏に師事し、共に修了演奏会に選抜出演。その後、朝日推薦演奏会、朝の

パルナソスハーモニー、京都市立芸術大学出身者によるフレッシュコンサートなどの演奏会に出演。現在は音楽教室を主宰し、後進の指導に携わる傍ら、バーゼル国際音楽コンクールにて伴奏賞受賞するなど、ピアニストとして多方面で活動中。

これまでに、横山 理子、名畑ゆかり、芝 令子、矢部 民の各氏に師事。



平林知子

京都市立堀川高校音楽科（現・京都市立京都堀川音楽高校）を経て、京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻を卒業。ピアノソロをはじめ、ピアノデュオや声楽・弦・管・打楽器とのアンサンブルで多数の演奏会、コンクール、講習会等に出演。またFM放送やCD録音に参加、新作初演にも多く関わっている。とりわけ合唱との共演においては、現在関西を拠点に、東京、静岡、長野、

愛知、岐阜、島根などで常任ピアニストをつとめる他、各地で精力的な活動を展開している。



野間春美

桐朋学園大学音楽学部音楽科ピアノ専攻を経て同大学研究科を修了。第5回友愛ドイツ歌曲コンクールにおいて優秀伴奏者賞受賞、第7回日本室内楽コンクール入賞。大学在学中より室内楽をはじめとするアンサンブルピアニストとして活動を始めNHK交響楽団や東京交響楽団他などのメンバーと数々の演奏会で共演。NHK-FM「土曜リサイタル」「FMリサイタル」「BS-TBS日

本名曲アルバム」に出演するほかNHK全国学校音楽コンクール、学校音楽教材などのレコーディングに多数携わる。またオーケストラ鍵盤奏者としての活動や伴奏法の講座を持つなどその活動は多岐にわたっている。これまで、桐朋学園大学嘱託演奏員、新国立オペラ研修所のピアニストを務める。



斉木ユリ

桐朋学園大学音楽学部卒業。飯守美絵子、徳丸聡子の両氏に師事。室内楽、合唱などの共演者として多くの演奏会に出演、放送、録音に参加し、邦人作曲家の初演なども行っている。日本国際音楽コンクール（ヴァイオリン部門）で公式伴奏者を数年務め、1995年、第6回の当コンクールで最優秀伴奏者賞を受賞。2006年、第1回カサド国際チェロ・コンクールで公式伴奏者を務め原智恵子賞（最優秀伴奏者

賞）を受賞。現在、桐朋学園大学附属「子どものための音楽教室」講師、NHK東京児童合唱団客員ピアニスト。



浅井道子

都立芸術高校（現・都立総合芸術）音楽科を経て桐朋学園大学音楽学部を卒業。真柄万里子、関根春世、今泉統子、高良芳枝の各氏に師事。室内楽を三善晃氏に師事。独唱、合唱、室内楽における共演者としてさまざまな演奏会、放送に出演。『Miyoshiピアノメソッド』（ピクチャーエンタテインメント）をはじめとして録音にも多数参加している。ソロコンサートのほかには東京文化会館

主催『今日の作曲家シリーズ』、MUSIC TODAY等で日本の現代ピアノ作品を演奏した。



CANTUS ANIMAE

Chœur Chêne

Combinir di Corista

MODOKI